聖上傳全集

第Ⅱ期　第二十一巻

翻訳 4

郭上海

江苏工业学院图书馆
藏书章

第Ⅱ期　第二十一卷

岩波書店

野上彌生子全集
第II期 第二十一巻
第十一回配本
（全二十六巻）

一九八七年九月七日　発行

定価四四〇〇円

著者　野上彌生子（のがみやえこ）
発行者　緑川亨
発行所　株式会社　岩波書店
〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六-二六二四〇

印刷・精興社　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 野上素一 1987 Printed in Japan
ISBN 4-00-091171-6

目次

アルプスの山の娘　スピリ……………………一
虹の花　オーステン……………………………二〇一
後記…………………………………………六三七

アルプスの山の娘（ハイヂ）

ヨハンナ・スピリ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

一　アルムをぢさん……五
二　山の上の暮らし……一九
三　山羊の群……二六
四　山羊飼のうちのおばあさん……三八
五　お客さま……五〇
六　新しい生活……六二
七　家政婦の不平……七三
八　大さわぎ……八六
九　ヘル・ゼーゼマンの帰宅……九八
十　新しいおばあさま……一〇七
十一　山恋ひ……一二一
十二　幽霊……一三八
十三　たのしい山へ……一四三
十四　日曜日の鐘の音……一六七
十五　旅行の支度……一八六
十六　お客さま……一九五
十七　御恩返し……二〇六
十八　デルフリの冬……二二三
十九　冬のつづき……二三三
二十　友のたより……二三九
二十一　おぢいさんの家での生活……二四八
二十二　意外なこと……二五八
二十三　さよなら……二七四
あとがき……二九九

一　アルムをぢさん

スウィスのマイエンフェルトといふ古風な、気もちのよい村から、一すぢの路が緑いろの牧場を抜けて、うねうねと遠く山の麓まで曲つてゐます。のぼるほど景色が開けて行き、やがて短い草や、山の硬い植物の匂ひがして来ます。道は山の頂上まで、だんだん嶮しくなりながら、まつすぐについてゐます。

六月の、晴れわたつた暑い朝、背の高い、いかつい顔をした娘が、五つばかりの小さい女の児の手をひいて、細い山道をのぼつてゐました。女の児は頬をまつ赤にして、暑がつてゐました。六月の太陽に照りつけられてゐるせゐもあつたが、一つはびつくらするほど厚着をしてゐるためでした。まつたく女の児は二三枚も重ね着をして、鎧をつけたやうになつてゐる上に、毛織の赤いショールまでしてゐるし、足にはあつぼつたい山靴をはいてゐるので、ただまん丸くなつて暑がり、はあはあ云ひながらやつと歩いてゐました。

村を離れて一時間ばかりも歩くと、山の中腹にあるデルフリといふ小村につきました。この村は娘の生れ故郷なので、あちこちから挨拶を受けました。窓から呼ぶものもあれば、戸をあけて呼ぶものもあるし、外のひとはまた外で声をかけました。でも、娘は知らぬ顔してずんずん通りぬけ、村はづれにさしかかると、一番はしつこの家の中から一人のかみさんが呼びとめました。

「ちよつと待つて、デーテ、山へのぼるのなら一緒にわたしも行くから。」
かう云はれて娘は立ちどまつたから、女の児は手をはなし、地べたへ坐りこんでしまひました。
「疲れたの、ハイヂ。」
娘はたづねました。
「いいえ、暑いの。」
ハイヂは答へました。
「すぐと頂上だから、もう少し元気をだしなさい。さつさと歩けばわけないのよ。」
デーテは励ますやうな声で云ひました。
はきはきして、人のよささうなバルベルといふそのかみさんが今度は連れになり、先にたつて歩きだしました。さうして二人がデルフリや近所の村の噂話をして歩くうちに、女の児はあとになつてしまひました。かみさんはそれがデーテの亡くなつた姉さんの娘だといふことを知つてゐました。
「あの児をどこへやるつもりなの。」
「アルムをぢさんのところへ連れて行かうともつて。あそこへ預けることにしたのです。」
「あの児をアルムをぢさんに預けるつて。気でも狂つたのぢやないの、デーテ、どうしたらそんな気になれるでせう。だいち、おぢいさんが承知するもんですかつて。」
「そんな筈はありませんよ。とにかくアルムをぢさんは、あの児には一人つきりのおぢいさんなんですからね。今日まではわたしが面倒を見てたんですが、わたしにもよい奉公口が出来たので、

あの児のために取り遁したくはないのです。さうなりや、おぢいさんが世話をするのは当然ですわ。」

「それにしてもさ、おぢいさんつて人がほかのひとみたいなら文句はないのだけれど。」

バルベルは熱心に主張しました。「アルムをぢさんがどんな人かつてことは、おまへさんも知つてるぢやありませんか。あのひとに子供なんて仕様がないわ。ことにあんなちつちやな子供だもの。子供だつてあのおぢいさんとぢや暮らされやしませんよ。——そして、おまへさんはどこへ奉公に行くの。」

「フランクフルトへ行くのです。この上なしの口が待つてるんですもの。それはね、昨年ラガツの温泉へいらした方でね、そのお部屋をわたしが受けもつてたのが縁で、その時も来ないかつて云はれたのだけれども行けなかつたのです。さうしたら今度またいらして勧められたので、わたしも決心したのです。おまへさんだつて行く気になりますよ。」

「あの児こそ可哀さうなものだ。」

バルベルは憐むやうな手ぶりをして叫びました。「アルムをぢさんが山でどんな暮らしをしてゐるか、知つたものもないくらゐですからね。誰とも交際もしなければ、教会に足踏みもしないしさ。たまに山から下りて来ればみんな遁げて歩くぢやありませんか。あのもぢやもぢやの灰いろの眉毛と、深い鬚と、太い杖をちらと見ただけでも怖ろしくなるんですよ。」

「そんなことはどうだつて構やしません。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

デーテはきつぱりした声で云ひました。「とにかくあのひとはおぢいさんなんですもの。子供の面倒を見るのはあたりまへです。あの児のためにならないやうなことはしやしませんよ。もしもそんなことがあつたら、その報いはあのひとに来るので、わたしに来るわけぢやないわ。」

さてこのかみさんは、アルムをぢさんがなぜ人間を嫌つて山の上にたつた一人で住まつてゐるのか、また村のものが彼の噂をする時に、反対するのも恐ろしければ、味方をするのもいやだといふ風にひそひそ話をするのか、その訳がわかりませんでした。その上デルフリ村のみんなのをぢさんと云ふわけでもないのに、誰からでもアルムをぢさんと呼ばれてゐる訳もわかりませんでした。彼女自身にしても、村の人たちが呼んでゐる通りに、ただをぢさんと云つてゐるだけでした。それに彼女はよその村からほんの近ごろ嫁に来たのに、デーテはデルフリの生れで、一年まへに母親が亡くなるまではいつしよに村で暮らしてをり、その後ラガツの温泉場の大きなホテルにつとめました。そこからこのマイエンフェルトの村まではかなり道のりがあるので、今朝女の児をつれて来る時には、知りあひの人の枯草馬車に乗せてもらつて来たやうなわけでした。

バルベルはよい機会だから、アルムをぢさんのことをこのデーテからなにもかも聞きださうと決心しました。で、信じきつた様子でデーテと腕を組みながら云ひました。

「おまへさんなら、アルムをぢさんのことはなんだつて知つてるんだから、ほんとうのことを話してくれるわね。あのひとはどんなわるいことをしたと云ふの。誰とも交際しないやうな、あんな人間嫌ひには、いつからなつたの。」

「だつて、わたしは二十六にしかならないし、あのひとはもう七十ぢやありませんか。いつからどうしてあんな風になつたなんて知る筈ないわ。でもおまへさんがあんまりおしやべりをしなけりや話してもいいけれど、まあちよつと待つて。」

デーテは警戒するやうにうしろをふり向きました。子供に聞えはしないかと思つたのでした。けれども子供のすがたは見えませんでした。二人で話しこんでゐるあひだに、おくれて路にはぐれたものと見えます。デーテは立ちどまり、方方を見廻しました。路はあちこちと少しづつ曲つてはゐても、デルフリ村まで一と目で見おろされるのでした。が、女の児らしいものは見あたりませんでした。

「あすこにゐるぢやないの。」

バルベルは叫び、路のずつと向ふを指さして見せました。「ほらね、山羊飼の子供と山羊について、向ふの坂をのぼつてるのですよ。あの山羊飼は今日はどうしてかう遅かつたのか知ら。でも丁度よかつたわ。あの男の子がお守をしてくれるから。わたしたちはもつと話して行けるわ。」

「お守なんて、そんなものいるものですか。」

デーテは云ひました。「あの女の児は五つにしては馬鹿ぢやないのよ。なかなか悧巧なの。なにかがちやんと分つてるんですもの。おぢいさんの役に立つ時が来ますよ。なんしろあのひとには、山羊が二匹と小屋があるつきりなんですからねえ。」

「あのひとにだつて、以前はもつとなにかあつたんでせう。」

「わたしもさう思ふの。あのひとはもとはドムレッシュでも一番といふ畑をもつてゐたのです。ふたり兄弟の兄さんでね、弟はものしづかな、きちやうめんな性質だつたけれど、あのひとは遊ぶ一方の派手な紳士で、近くの村を馬車で乗りまはしたり、よくない仲間や、素姓の知れない外国人と交際したりしたのです。ありつたけの財産を、お酒と賭ごとでなくしてしまつたのです。それが知れると、両親は悲しみのあまりに亡くなつてしまひ、弟の方は乞食のやうになつて土地を出たきり、行方が分らないのです。アルムをぢさんにしても、自分の評判があまり悪いので身を隠してしまひました。しばらくはどこにどう暮してるか知れなかつたが、そのうちにナポリで兵隊になつてゐることが分りました。それから十五六年もたつてから、ひよつくり若い息子をつれてドムレッシュに帰つて来ると、どこか親類のうちへその息子を預けようとしたのです。けれどもどこの家もいい顔をしなかつたので、あのひとはその仕打にひどく腹を立て、二度とドムレッシュへは足踏みをしないと云つて、デルフリへおちつき、その小さい息子といつしよに住まつてゐました。かみさんは結婚するとまもなく亡くなつたのです。息子のトビアスは大工へ弟子入りをさせてあつて、お金もまるつきりないといふ訳でもなかつたのです。丈夫な若者だつたから、デルフリの人たちは息子には親切にしてやつたけれど、をぢさんの方はなんとなく疑ひの目で見られ、ナポリから遁げて来たのも、喧嘩で人を殺してゐられなくなつたのだ、と噂するくらゐでした。わたしたちは、それでもあのひとと親類だといふことを隠しませんでした。わたしの母方の大お祖母さんが、あのひとのおばあさんの妹にあたるのです。それで、わたしのうちであのひとのことををぢさんと云つたので、

村の人たちもみんなさう云ふやうになり、山に住むやうになつてからは、山の名前をとつてアルムをぢさんと云ふやうになつたのです。」

「それで、息子のトビアスはどうなつたの。」

バルベルはおもしろさうに聞いてゐた末に、たづねました。

「まあお待ちなさいよ。これからその話になるのだけれど、さうなにもかも一時には出来ないわ。」

デーテはかう答へておいて、それからしづかにトビアスの話に移りました。「トビアスは年期奉公がすむとデルフリの村へ帰つて来て、わたしの姉のアデライデと結婚したのです。ふだんから仲よしだつたから、いつしよになつてからも大そう旨く行つてたのですが、でもその仕合せは長くつづかなかつたのです。結婚して二年とたたないうち、トビアスは仕事場で梁に打たれて死ぬと、その怖ろしい死様を見てアデライデは気を失ひ、二月目にはこれも亡くなつてしまひました。二人がこんな不運な目にあつたのも、をぢさんが神さまをないがしろにするやうな、不信心な行ひをしてゐる罰だつて、みんなが噂しました。面とむいてをぢさんにさういふ人さへありました。牧師さんはをぢさんに改心させようとしたが、をぢさんはなほと腹立ちつぽく、えこぢになるばかりでした。神さまのことなぞ口にも出さないし、誰の云ふことも耳に入れませんでした。それからまもなく、二度とは下りて来ないと云つて山に登つたきり、そこにたつた一人で住み、神さまと人間に敵対するやうな暮らし方をしてるのです。お母さんとわたしは、アデライデの赤ん坊を引きとつて世話を

したのですが、昨年お母さんが亡くなつてからは、わたしも働かなきやならないから、赤ん坊は村のおばあさんに預けておいて温泉場へ奉公に出たのです。するとさつき云つたお客さまから、フランクフルトの話が出たものですからね、いよいよ行くとなれば明後日は立たなきやならないのです。」

「それであの児をおぢいさんのところへやつてしまはうと云ふのね。どうしてそんな気になれるか、呆れつちまふ。」

バルベルは非難しきつた声で云ひました。

「なぜなの、わたしはするだけのことはしたんですもの。この上は仕方がないのよ。五つにしかならない児を、フランクフルトへ連れて行くわけにはいかないんですからね。それはさうと、バルベル、おまへさんはどこへ行くの、山ももう半分来たのよ。」

「ああ、ここまでいいのだわ。山羊飼のとこのかみさんが毛糸をとつてくれるのでね、それに用事があつて来たのだから、ぢや、さよなら、デーテ、御機嫌よう。」

バルベルは友だちと握手をすると、そのまま路からすこし引つこんだ窪地にある、小さい、灰いろの小屋へ歩いて行きました。これが山羊飼の家で、丁度アルム山の中腹になつてゐました。とても人が住めさうもないほどいたんだ古い建物で、山から激しい南風が吹きおろして来ると、戸でも窓でも小屋ぢうのものががたがた鳴り震へ、腐れた梁はきいきい云つて揺れる始末で、いろいろな差しかけがしてありました。もしむきだしになつてゐたら、暴風雨（あらし）の日には小屋は一たまりもなく

村まで落つこちて来るにきまつてゐます。

このうちにはペーテルと呼ぶ十一になる男の児があつて、毎朝デルフリの村までおりて山羊たちを山へ追ひあげては、夕方までおいしい山の草を食べさせてゐました。

ペーテルは脚の軽い獣たちと一日ぢう山を駈けまはり、やがて夕方になつてデルフリの村まで連れておりると、指を唇にあてて鋭い口笛を吹きます。すると山羊の持主がみんなあらはれ、めいめいの山羊を連れて帰ります。ペーテルの口笛をきいて駈けだすのは、たいてい小さい男の児や女の児でした。山羊は優しいので誰も怖がるものはないのでした。ながい夏ぢう、ペーテルが子供たちに逢ふのはこんな時だけで、あとは山羊とばかり遊んでゐるのでした。家にはお母さんと盲目のおばあさんがあるのですが、朝は暗いうちに出掛けるし、夜はさうやつて子供たちと遊んで来るので、家ではほんの朝晩パンとお乳の食事をするのと、寝床で眠るだけでありました。お父さんも山羊飼でしたが、つい五六年まへ森の樹を伐つてゐる時に、思ひがけなく樹の下敷になつて亡くなりました。お母さんの名前はブリギッタと云ひますが、やつぱり山羊飼のおかみさんで通つてゐるし、盲目のおばあさんはまた近所のみんなから「おばあさん」と呼ばれてゐました。

さてデーテは友だちのバルベルと別れてから、十分間も立ちどまつて方方を見廻したけれども、女の児も山羊飼も見えないので気がかりになつて来ました。で、すこし小高いところへ登つて、あたりの坂路へ目をくばつてゐました。そのあひだ、子供たちは、遠くの、曲りくねつた坂を登つてゐたのでした。ペーテルはどんな路でも知つてゐるし、その上はだしで、肌着一枚で、山羊に負け

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.